

# 兵庫県産甲虫類研究史概説（3）

高橋 寿郎

## 明治・大正時代の研究

明治10年（1877）4月12日東京開成学校および東京医学校を合併して東京大学と改称し、法・理・医及び文学の四学部を置いた。動物学教授はアメリカ人モールズでありその第1回の卒業生が佐々木忠次郎博士である。

日本人による昆虫学研究の最初の発表は佐々木忠次郎博士が明治19年発表された“カイコノウジバエの microtype-egg の生活史の研究”（1866）であるとのこと。

日本の昆虫学の基礎を作った人の1人として吾々昆虫学を研究する者に忘れることの出来ない人に松村松年博士がいる。明治5年3月5日兵庫県明石郡大明石町東片端に生れるとあるから兵庫県出身の方である。ただ残念なことに明治17年には大阪の川口英和学会へ入学、京都同志社、英和学校、東京明治学院予備校を経て札幌農学校に入学（現北海道大学）、その人生のほとんどを北海道と東京で過ごされたので兵庫の虫とのつながりは研究論文以外には割合なく兵庫県下で採集された標本によるご自身の研究発表或いは当時の札幌農学校、後の東北帝国大学農科大学、北海道帝国大学農学部等で研究された方々による発表の材料として利用された県下産の標本による寄与はかなりある。また松村博士の研究材料を提供されていた人に鈴木元次郎氏がありその頃各地を採集していたが晩年は明石に花園昆虫研究所を開いておられ私もその頃お伺いしたことがある（昭和15年頃）、氏はその後宝塚昆虫館にもおられた。

兵庫県下の昆虫相を日本人によって一番始めに発表された人として大上宇市氏を挙げる事が出来る。氏は慶応元年五年十七日揖保郡香島村篠首に生れた。学歴はほとんどなく独力で動植物を主とする自然研究を生涯に捧げた。採集は生地を中心に雪彦山、船越山を始め近畿地方各地に及び全国各地の同好者との標本の交換、諸種の書籍を借覧書き抄録し、或いは自ら図を書き著述もなした。明治23年頃から諸種の雑誌に投稿を始めた。

一番始めに投稿発表されたのは「東洋奇術新報 第3号（明治23年9月）」だと思われる。内容の内“毛虫を防ぐ法に就いて、毛虫の毒に就いて問ふ”等昆虫に関する記事もふくまれている。昆虫関係の報文はその後動物学雑誌、昆虫世界に主として発表をしている。氏はどちらかと云えば菌類、植物、貝類の研究などで良く知られているが昆虫についてもなかなか造詣が深く、特に発蜂に関する著

作も多くある。昭和16年77才にて歿すとある（大上宇市氏に関する資料は1992年3月新宮町教育委員会から“没後50周年記念、郷土の偉大な博物学者 大上宇市、新宮町文化財調査報告17”として出版された。氏に関してはこの書によって詳しくわかる）。

東京大学が設立された翌年“東京生物学会”が出来、明治15年に植物学会が分離して“東京植物学会”となり残された方は必然的に“東京動物学会”となった。そしてその機関誌“動物学雑誌”が創刊されたのが明治21年11月である。当時他に未だ昆虫専門誌は発行されていなかったので当然昆虫の記事もこの雑誌に発表された。

大上宇市氏の兵庫県の昆虫に関する報文の発表されたのは同誌139号（明治33年5月）“播磨産蝶類報・播磨網干港の採集”である。それ以前には他誌に害虫関係の報文の発表が若干ある。その後同誌13巻（明治34年）に兵庫県の甲虫相が発表された。発表されたものは播磨産象鼻虫科、天牛科、金龟子科、金花虫科、歩行虫科、朽木虫科（13：155, 156, 167号）の各科で当時充分な文献もなく分類同定に大変苦勞があったと思われる。従って之等の報文は学名のないものも多く和名だけで記載も無いことから現在その全部の記録種を判別はし難い（標本も現存していないので）。特に珍しいものはふくまれていないようであるが兵庫の昆虫の研究が欧米人による兵庫（神戸）を中心とした地点で始まり日本人による兵庫県の昆虫相の研究が揖保郡、佐用郡で始まったことは注目されるべきで明治迄の県下の文化が姫路から西に開けていたことがうかがえる。

井口宗平氏は佐用郡久崎村の人、明治の終り頃盛んに昆虫採集をされそれを松村博士のもとに送った。松村博士はそれに基づいて次々と新種を発表されたが井口氏の名をつけた虫も多い。例えばイグチヒラタカメムシ、イグチヒシウンカ、ウチグロヒメヨコバイ、イグチヒメヨコバイ、ハナダカサシガメ、イグチベニサシガメ、イグチサシガメ等は井口氏を記念して名付けられた虫であり井口氏の発見した昆虫としてはハリマヒメヨコバイ、マヘキヒメヨコバイ、スカシヒメカメムシ、コバネマキバサシガメ等がありいずれも播磨産のものである。但し甲虫類の記録のほとんどないのが残念である（井口宗平氏明治十八年七月生れ、先祖伝来の百姓。明治三十七年岐阜市名和昆虫研究所に入り害虫益虫の研究をすること2年、帰宅後7、8年間引続き昆虫の採集と研究に没頭し、標本3,000余種をつくる。久崎村の村長に選ばれて一期間在職、昭和三十二年から同志の協力のもとに“久崎町誌”の編集に着手し同三十七年刊行、その後引続き“佐用郡ことわざ集”“彦八ばなし”“佐用郡俗語方言集”昭和四十一年には“のじぎく文庫”から“民謡の炉ばた”を出版）。

名和昆虫研究所より昆虫雑誌“昆虫世界”が創刊されたのが明治30年でありその後50年にわたって休むことなく発行され日本の昆虫学発展のため大いに貢献した雑誌であり当時の多くの昆虫学者が執筆し新進無名のアマチュア研究者の研究発表の機関としても広く利用された。

大上宇市氏も再び県下の甲虫相を発表しておられる。即ち明治39年（1906）“播磨産甲虫類”と題

して同誌10巻112号, 1907年, 11巻, 115-118号に299種の甲虫類を記録。今回の報文は前回と異なり Lewis 氏の日本甲虫目録, 松村松年博士の日本千虫図解, 日本昆虫学, 動物学雑誌, 昆虫世界を夫々参考とした価値ある研究発表となっている。

井口宗平氏も同じ年, 同じ雑誌上の数多くの論文を発表しておられる。10巻101号に“アカフチミドリとササナミウドハマキに就いて”を発表され (p. 34-35), 引続き昆虫雑観 1-6 (10巻106号: 247-248, 在岐阜とある。108号: 333-335, 109号: 375-377, 110号: 424-426, 111号: 461-463, 11巻: 113号: 29-31), 第11巻, 第121号: 418-420に“兵庫県佐用郡産蝶類目録”なる表題で68種を記録, その後“佐用郡昆虫目録”を12巻, p. 116, 158, 201, 251, 291, 335, 337-1908に夫々発表されている。氏の報文は甲虫に関するものは極めて少なく僅かに上記昆虫雑観一に豌豆象虫と豆象虫, 亀甲瓢虫 (カメノコテントウ), 二, ヒメマルカツオムシ, 三, 葉捲象鼻, 五, シギゾウムシ, 六, クロウリハムシの記述がある。

芝川又之助氏も明治36年 (1903) 頃より須磨, 甲東村大市を中心に採集研究をしておられ発表もされ, その採集された標本は鈴木元次郎氏が整理し戸沢信義氏が保管しておられたが1946年宝塚昆虫館に寄贈された。その標本の内容については1936年戸沢信義氏が“紫水遺稿”別巻としてまとめられ産地も詳しく出ている。

この時代に忘れてならない人にルイス氏がいる。ルイス (John E. A. Lewis, 1862-1938), 明治初年来訪, 日本の昆虫学, 甲虫類の基礎をつくったルイス氏 (前出) とイニシアルこそ違うが同じ名であり混同し易いがこのルイス氏はボルネオのサラワク政府官吏として奉職その後行政官に任命, 政府印刷局兼サラワクガゼット編集長の後警察監獄検閲長官から第一行政理事室, 国会議員, 同会議書記官となり退官するまで約20年間ボルネオの昆虫を蒐集その標本全部を大英博物館に寄贈の後永住の地として神戸市をえらんで来日したのは1909年 (明治42年) のことである。

神戸市原田に居を構えられて亡くなられる昭和13年 (1938) 迄神戸を中心として全国を採集され主として甲虫類であるが採集した標本は夫々専門家に送って研究を依頼され自分ではアマチュアであるからと発表されることがなかったので文献には残っていないがルイスの名を学名にとり入れられたのは多くある。

また神戸の名をつけられた虫もルイス氏の採集が神戸付近中心であるからかなりある。ルイス氏が専門家に送って種名を決定されたのは2,538種以上あると。専門家に送って種名を確定されたのは同じ種の余分個体は送り返してもらっておられるので大変貴重な標本で日本の甲虫を研究する上に欠くことの出来ない標本であり, 死後その標本は京都大学へ, 蔵書は関西昆虫学会へ寄贈され保管された (京都大学の標本は管理が悪く現存しないのではないかとのこと)。\*

池長 孟氏は神戸市兵庫の井上家に生れ兵庫の素封家池長 通の養子となった人で私立育英商業  
\*戸沢信義, コレクションの行方, 宝塚昆虫館報(51): 22, 1948.

学校（現育英高校）校主兼校長として後“池長美術館”を開設したことで有名な人。植物・昆虫の採集をして会下山に“池長昆虫館”をつくり昆虫・貝のコレクションを展示されたと。その後は池長美術館を作る方に発展された。この昆虫館のことは詳しくはわからないが大正6～10年（1917～1921）頃に作られたものようである（1989年池長 孟の自伝が高見沢たか子著“黄金の港”（筑摩書房）として出版された。それによると会下山にこしらえたのは池長植物研究所でそれは一般に公開されることなく終わったようである）。

この当時の大変面白い記録が戸澤信義氏の御教示で知ることが出来た（私信）。即ち大正7年頃JR（当時は鉄道院）三宮駅（今の元町駅付近）の貨物掛に勤務されていた加古川在住の高田千万喜という人が駅構内で貨物からこぼれたものを採集された標本並びにその他の地で採集した標本を持参戸沢氏を訪問された由（その時の標本に基づいて野平安芸雄博士が昆虫学雑誌、第3巻、第3、4号、1919に短報を発表しておられる）。その中には烏原で採集されたキベリハムシの標本が数頭あったと（この記録は日本での本種の初めての記録であると考えられる）。駅構内での採集品の中にはダイコクコガネ、外国産の甲虫があり、インド、オーストラリア産らしい標本がありそれらが貨物からこぼれたものであるとのこと。当時の状況から外国産の昆虫が日本に潜入することが可成りあったのではないだろうか（日本に定着出来たかどうかは別として）。従ってこのような経過でキベリハムシが神戸に定着したのではないかと考えられ大変面白い記録である。尚同氏のコレクションは土地の素封家に譲られた由、一部は京都大学に売られたということである。

明治・大正時代の文献は充分見られなかったのでこの時代の兵庫県昆虫研究史はこれ以上わからなかった。だが日本の昆虫学の発展も次第に調子をあげてきていわゆる昭和初期黄金時代に入ることになる。

## 兵庫県下でのエグリゴミムシの分布

（兵庫県甲虫相資料・273）

高橋 寿郎

エグリゴミムシは G. Lewis が1896年 *Eustra batesi* Lewis として新種記載をされた（Ann. Mag.